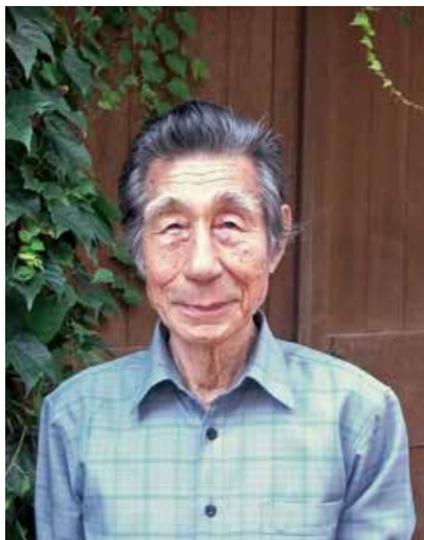


もういちど自然と建築について話をしよう

第2回 人知と自然の力

池田 武邦



池田 武邦（いけだ・たけくに）

1924（大正13）年1月14日、関東大震災の避難先であった静岡県で生まれ、その後神奈川県藤沢市に移り旧制湘南中学時代までを過ごす。40年海軍兵学校入学、43年同校第72期卒業。海軍士官としてマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、沖縄海上特攻の3つの作戦に参加し、最後の沖縄海上特攻で乗艦していた「矢矧」が撃沈されるも漂流後救助され生還。その後大竹の海軍潜水学校の教官となり終戦を迎えた。49年東京大学第一工学部建築学科を卒業。同年山下寿郎設計事務所（現・山下設計）に入社し、日本初の超高層ビル「霞ヶ関ビル」の設計に携わり、67年日本設計事務所（現・日本設計）の設立に参画。「京王プラザホテル」「新宿三井ビル」など超高層ビルを次々に手がけながら、新しい設計組織の構築を目指す。76年同社社長、92年同社会長。自然に対する畏敬を理念に「長崎オランダ村」や「ハウステンボス」などの作品を生み出している。1995年池田塾開設。2001年には長崎県西海市の大村湾に茅葺きの「邦久庵」を設けた。主な著書に「大地に立つ」「軍艦「矢矧」海戦期」「二十一世紀は江戸に学べ」「次世代への伝言」「超高層から茅葺きへ」「建築家の畏敬」ほか多数。

H.G. ウエルズ『奇蹟人間』を77年ぶりに観る

「もし人間が神様から万能の力を与えられたら、そのとき人間は、すべての望みが叶う能力をどんなことに使いどう振る舞うようになるだろうか……？」

もう80年近く前のことである。わたしがまだ藤沢小学校に通っていた頃、兄と連れ立って当時住んでいた神奈川県藤沢市内の映画館で観た、ある外国映画のハイライトシーンをいまでも忘れない。1936（昭和11）年に公開されたイギリス映画『奇蹟人間』（原題：Man Who Could Work Miracles）で、『タイム・マシン』『宇宙戦争』『透明人間』などの初期の優れたSF作家としても名高い、イギリス人小説家ハーバート・ジョージ・ウエルズ（1866-1946）の作品である。わたしはこの作品のシーンを記憶していたが、2年ほど前に復刊されたことを最近になって知り、懐かしい数々のシーンをおよそ80年ぶりに見る機会を得たのである。

物語はこんなシーンから始まる。

2人の神様が馬に乗って雲上界をやってくると、もう1人の神様が下界を飽きもせず眺めている。その姿を見た2人の神様が声をかけ、神様同士のやりとりが始まる。

「われわれの兄弟一力を与えし者は、またあの星（地球）を弄んでいるな。その生物は放っておけんのか？」

「人間だよ」

「下等生物たちがうじゃうじゃしているじゃないか。なぜそんなものを愛でているのか？」

「小さくて多いが、僕は好きなんだ。弱いものでなければこんなに美しくはないし、短い一生を精一杯生きている」

人間鬮員の神様がそう言うと、ひらめきとともに人間を実験してみようと提案する。

「少しパワーを与えれば、もっとよくなるかもしれない」

「だめだ。あまり能力を与えてはいけぬ。パカで呼吸しかできないような人間が、われわれの星に来てしまう。人間全員に力を与える気なのか？ 無限の力を、万能の力をか？」

「限りはある。だからマスターが必要なんだ。この砂粒のような人間に力などない。魂や個性は謎に包まれていて、マスターだけが操れる。精神は自由にするがその他はすべて

僕の支配下さ……」

人間に対する絶対的配力に自信を持つ神様は、人間全員に万能の能力を与えると主張するが、ほかの2人の神様に説得されてひとまず1人の人間に万能の能力を与えてみるようになった。真面目で気の弱そうな仕立屋のフォザリングイ、それが実験台に指名されたこの物語の主人公である。

万能の能力を得た主人公は、さまざまな奇蹟を起して好きな女性を喜ばせたり、邪魔者を飛ばしたりして存分に超能力を楽しむが、人の心だけはどうしても自由に操れないことに気づく。そこで能力を持て余し始めた彼は、古代都市国家のような理想郷を創りたいと言い出した。

理想郷で彼は王子になったり、好きな女性を女王にしたり、家来や兵隊をはじめ賢者や指導者まで雇い、平和な理想国家を早急につくるように命じるが、そんな大掛かりのことを実現するには「到底時間が足りない」と断られてしまう。苛立つ主人公は、この映画のなかの最大のハイライトシーンである奇蹟を巻き起こしてしまう。

「時間が無いというなら、地球の自転を止めてしまえばいいじゃないか……」

自転を止めるという奇蹟は、地球に巨大な慣性力を発生させ、古代都市の石造りの宮殿もろとも、地上のあらゆるものを高速で吹き飛ばしてしまう。その様子を見ていた神様たちは、人間に万能の力を与える実験が失敗したことを認める。

80年近く経ってもこの映画が忘れられないのは、都市が塵芥のように簡単に飛ばされてしまう特撮シーンが、当時中学生だったわたしには鮮烈だったからかもしれないが、たとえ人びとのためになることであっても、人間が傲り高ぶり人知を過信して自然の力を超えるようなことをすれば、必ず失敗する。この映画にはそうした暗示があると、子どもながら気づいたからではないかと思っている。

物資不足でも戦後の日本は希望に満ちていた

わたしにとって戦争もまた、人知は自然力を超えることではないという貴重な体験だったように思う。戦後処理には

陸軍省が第1復員局、海軍省が第2復員局となり、外地に残った大勢の日本人を船で内地に運んだ時期があった。海軍出身のわたしは第2復員局の復員事務官として、引き上げてきた人たちに自宅までの旅費を支給したり、傷病者を病院に入院させたりする仕事に従事していた。

外地からの引上者はまだ大勢いたし、海軍兵学校出身のわたしには大学に入り直そうという気持ちは少しもなかった。終戦直後は元軍人が大学に入ることは許されなかったこともあるが、それが暫くすると定員の1割以内なら元軍人であっても受け入れてよいというマッカーサーの通達が出た。それを新聞で知った父親が東京大学の入学願書を携え、当時わたしが勤務していた浦賀の復員局に訪ねてきた。

「もうお国のためには十分尽くしたから大学を受けろ」

海軍士官の先輩でもある父親は、わたしが乗艦していた「矢矧」が沈められて九死に一生を得たことや、わたしの海軍兵学校の同期が625名のうち2年たらずで半数以上が亡くなったことをよく知っていた。戦後も戦後処理を担う復員業務に一所懸命に従事しているわたしの姿を見て、もうこれからは国のためだけでなく自分のためにも生きろと言ってくれているのだと感じた。

海軍士官として戦争に勝てなかった責任はいまも感じているが、当時まだわたしは22歳になったばかりの青年で、自分のためだけに自由に生きていこうとはさらさら思わぬまでも、父親の説得で大学に入り別の方法で国のために生きることではできるだけだろうと思うようになった。ただ、父親が浦賀に説得に来たのが2月で、入試は4月というから受験勉強の期間は2カ月もない。わたしは慌てて兵学校時代の教科書を取り出し、数学や英語を勉強し直したり、他の科目は兄たちに教えてもらったりしながら、なんとか東大に入ることができた。

入学後になぜわたしが建築の道を選んだかという、わたしのいとこの建築家・山本拙郎が設計した藤沢の自宅が、すこぶる快適な家だったからだ。夏は江ノ島方面からの海風が家の中を通り抜け、冬は陽だまりのあるベランダが暖かく、本当に居心地のよい家だと子どもでもよく理解できた。わたしは中学を修了して兵学校に入り、ずっと海軍士官になる勉強や訓練ばかりしてそのまま太平洋戦争の戦場

にいたから、一般社会のことはなにも知らなかった。海軍のこと以外に知っていることといえば、いとこが設計してくれた住宅が素晴らしい空間だという感動だけだった。だからわたしは迷わずに、海軍の世界以外に自分の進む路を建築設計の世界に決めたのである。

東大建築学科の同期は30名ほどだったが、終戦後の物資不足で図面を描くにも用紙がなく、いまのようにお金を払いさえすればすぐに手に入るような時代ではなかった。それよりも食糧難で毎日喰うや喰わずの状況だから、若い人たちが勉強もあまり熱心ではないのは仕方がなかった。ところがわたしはといえば、長い間戦場にいたので、大学の講義があまりにも興味深いものばかりに感じられて、建築学科の履修科目とは関係のないフランス文学の講義まで聴きに行くほどの熱心さだったのである。

ただ、世の中はまだ終戦の混乱期にあったから、多くの学生は授業にも出ず試験の成績も当然いいはずがない。しかも旧制高校を優秀な成績で卒業して東大に入学して来るようなかつてのエリート学生とはもともと質が違うのだから、卒業するときに当時建築学科の教授だった岸田日出刀先生から、「君たちのクラスは帝国大学はじめて以来最低だった」と言われたことをよく覚えている。

1949（昭和24）年に大学を卒業するとわたしは、同級生の紹介で山下寿郎設計事務所に入所することになった。丸の内レンガ街にあるビルの一画で、当時30～40名ほどの所員を抱える組織設計事務所だったが、戦後の燃料不足で冬はスチーム暖房代わりにダルマストーブに古くなった製図板やT定規をくべて暖をとり寒さをしのぐようなこともしていた。所員は戦地から引き上げてきた軍人や満州から引き上げてきた人たちが多く、食料不足への不安や物質的な貧しさはあったが、それでも無事帰国できたことの安堵感や、これからは自由になんでもできるという解放感が溢れているように感じられ、皆どこか希望に満ちあふれた表情をしていたように思う。

わたしも同様に、戦後の大学での建築教育や就職後の設計事務所での仕事を新鮮に感じ、戦後復興とともに少しずつ増える建築設計のプロジェクトに情熱を注ぐことが喜びになっていた。だがかつて海軍士官だったわたしは、1952

（昭和27）年頃までは公職追放の処分を受けていたため、設計事務所においても表立って公共建築のプロジェクトに参加することはできなかった。やがて公職追放が解除になると、福島県庁舎やNHK放送センター、新潟県庁舎、横浜市庁舎などのコンペにチーフとして参画し、このうち当選した福島県庁舎とNHK放送センターは実施設計まで関わることになった。

戦後すぐの頃の設計事務所の多くは、戦前からの徒弟制度の慣習を守り続けているところが多かったが、山下寿郎設計事務所は代表の山下寿郎さんがリベラルな方だったこともあり、若い所員の意見であっても自由に発言させ提案を採用してくれる雰囲気になっていた。軍隊と聞くと上官に対して反対意見を述べることなどあり得ないと思うかもしれないが、海軍に限ってはディスカッションでは自らの意見を自由に述べるのが常識になっていて、山下寿郎設計事務所に入所しても、海軍のときと同様に自由に自分の意見を述べてディスカッションできることが嬉しくて仕方がなかった。

超高層ビルで都心に緑を増やす組織設計力

わたしが復員局での勤務や、東大建築学科への進学のこと、大学卒業後の山下寿郎建築設計事務所での勤務の様子を述べたのは、日本が高度経済成長期に入るまでの、終戦から戦後復興に当たる10年に満たない年月が、実は戦前や高度成長期からいまに至るよりも自由で希望に満ちていた時代ではなかったかと思えるからだ。そうした時期に設計された作品には、しっかりした設計上の考え方や工夫がふんだんに盛り込まれていて非常に魅力があることを伝えたかったのである。

わたし自身は、建築設計は20歳を過ぎて足を踏み入れた世界だから、高度成長期に向かうに従って仕事の量も増え続けても、わたしにはどのプロジェクトも新鮮に感じられた。だから仕事がつまらないと思ったことはいちどもなかった。さらに設計事務所の仕事だけでは飽き足らなかったわたしは、海軍のリベラルな合理主義を基に建築界や設計事務所の近代化を推進したり、合理化のためにモジュール

研究会を立ち上げたりとかなり活動的だった。東大の吉武泰水研究室に通いながら、モデューラーコーディネーションをテーマに学位論文を書き上げたのもこの時期である。

そうこうするうちに、日本で初めての超高層オフィスビルとなる「霞が関ビル」の仕事に携わることになった。1960年、わたしが36歳のときである。チーフ設計者だったわたしは、モデューラーコーディネーションを基に100人を越えるスタッフの個人の能力を引き出しながら、それを組織としての相乗効果で何倍もの力にするかという仕事を、毎日のように現場で行っていた。また、超高層の霞が関ビルは、従来の規模とは違うまったく異なる構造だから、地震国の日本で必要な耐震性能を決定できる専門家や研究者はいなかった。そこで他分野の専門家も加えた、グループダイナミックスによる検討が必要であった。このグループダイナミックスの理論は、アメリカではすでに戦時中から行われていて、そのことを戦後になって知ったわたしは、アメリカの先進性に感服させられたことがあった。

そうした最中に、設計事務所の組織が大きくなるに従って、わたしが海軍時代から培ってきたリベラルで自由な発言が組織への反抗と見なされるようになり、若くして役員になっていたわたしは山下寿郎建築設計事務所を追われることになったのである。戦後の復興期は、物資は乏しかったけれど自由と希望はあった。ところが経済成長で物資も資金も潤沢になっていくに従い、わたしたちは組織の一員として窮屈な思いをしなければならなくなったのである。

霞が関ビルが竣工する前年の1967（昭和42）年9月1日、山下寿郎建築設計事務所を追われたわたしは、未来を見据えながらいままでにない設計組織をつくりあげること目標に、日本設計事務所を創設した。わたしはもはや個人名を設計事務所の冠にするような時代ではなく、設計活動はスタッフ1人ひとりの主体的精神活動と捉え、ピラミッド型の組織ではなくダイアゴナルに誰もが自由に自分の意見を述べられる組織を目指して出発した。

そうした独自の設計思想や組織力から生まれたのが「京王プラザホテル」や「新宿三井ビル」などの超高層作品である。元来、超高層ビルは都心に緑や土、水、太陽を確保するためにやむを得ず超高層にしているだけで、都市環境の

質的向上を目指した、あくまでも1つの手段である。わたしたち日本設計事務所が手がけた多くの超高層ビルの足元周辺が緑に覆われているのは、都心にどれだけ緑を確保できるかという超高層の原点に立ち戻った成果であり、竣工後40年以上が経過してますます緑の魅力を増し、訪れる人たちがこれほど心地よさを感じられる超高層の足回り空間は、そうざらにはないだろう。

こうした実作品が高く評価され、「環境の日本設計」といわれるまでになり、超高層の設計依頼も順調に来るようになった。わたしたちは自らの超高層ビルへの取り組み方が正しい方向性を辿っている、そう自負し始めた頃、わたしに天啓のような1つの出来事が起きた。

日本設計事務所の本社を新宿三井ビルの50階に移転して半年ほど経った頃、朝の出勤時はよい天気だったのが、夕方仕事を終えて1階のエントランスを出ると、いつもの見慣れていた足元回りの緑が一面の大雪に覆われ、銀世界に一変していたのだ。高層階の眺めのよい部屋で、一年中エアコンの温度調整でワイシャツ1枚でも仕事ができる環境は、生産性も向上しこれ以上のオフィス環境はないと感じていた。高層階が遮音されたうえに雲に覆われて見通せなかったとはいえ、表に出るまで降雪していたことにまったく気づかなかったことに、わたしは少なからず衝撃を受けた。

かつて海軍時代に、あれほど人知を超えた自然の力を何度も経験したわたしが、最先端の技術ばかり追いかけてきて、人間にとって本当に快適な環境を技術だけで解決しようとしてきたことに、このときはじめて気づいたのである。それは『奇跡人間』の主人公・フォザリンゲイが、万能の力を得てどんな奇蹟でも起せると大きな勘違いをした、彼の過ちとどれほど違いがあるだろう。わたしは自らが自然の感性を失いつつあったことに、大きな衝撃を受けたのである。（談） つづく

*編集部注：本稿は池田武邦先生への最新のインタビューを基に編集部で書き起こしたものであり文責は編集部にあります。